

『大鏡』と『史記』との比較

——「道長」伝と「李斯列傳」を中心に——

梁 音

はじめに

本稿でとりあげる二書のうち、『大鏡』¹は平安時代に著わされた「物語風史書」²で、「鏡物」³の祖型とされ、作者は不明である。一方、『史記』⁴は漢の武帝期に著わされた史書で、正史の首位に置かれ、作者は司馬遷であるとされている。

『大鏡短観抄』⁵をはじめとする『大鏡』の古い注釈書では、『史記』との関係は殆ど言及されることがなかったが、最初に言及されたのは藤岡作太郎氏であるとされている。⁶藤岡氏は『国文学全史平安朝篇』⁷において、以下のように『大鏡』が『史記』に倣ったものとされた。

従来の歴史は、漢文にかきたるものも、多くは編年体の書にして、僅かに類聚国史などのみ体裁を異にしたるものなりしが、この書に至りて、史記に倣いて、はじめて列伝体を用う。史記は三史の随一、三史は既に奈良朝に伝来し、平安朝に入りては、文選と併せて大経に准じて、紀伝道の最も重んずるところなれば、その流行や知るべきなり。 (二四六頁)

更に、藤岡氏の指摘を受けて、松村博司氏や松本治久氏にも『大鏡』における『史記』の影響について研究がある。⁸

但し、藤岡説を考察すると、当時『史記』が「三史」⁹の随一として重視されていたという点で、「紀伝体」¹⁰を採用した数多くの中国の史書の中から、特に『史記』が重視されたことは具体的に指摘されていなかった。後に松村氏が『歴史物語』において、『大鏡』が世家を省いた点では、むしろ『漢書』以下に似ているというような指摘もあった。

『大鏡』が『史記』の影響を受けていることを立証するためには、少なくとも以下の二点を明らかにする必要がある。

- (1) 『大鏡』がそれ以前の日本の史書と異なる特徴を有していること。
- (2) 中国では、『史記』だけがその特徴を有していること。

「紀伝体」という編纂スタイルの他に、更に内容に着目すると、まず、『大鏡』は「栄落史観」¹¹のもとで執筆されている点が注目される。これは『大鏡』以前の日本においては、「六国史」を始めとする史書や『栄花物語』などの「物語風史書」には見られない特徴である。一方、中国文学では、『史記』の中心史観として「物盛則衰」について指摘した論者もいるが、¹²『史記』に続く『漢書』や『後漢書』（范曄）以下の正史には見られず、『史記』固有の特徴とされている。

逆に、『大鏡』の研究においては「系譜」が重要な意味を持つものと重視されてきたが、それに対して『史記』における「帝系」は着目されることが少なかった。『大鏡』が『史記』の影響を受けたものであるならば、「系譜」についても何らかの共通点が存在することが予測される。

本稿は、第一章では『大鏡』の「栄落史観」と『史記』の「盛衰史観」¹³を論じ、『大鏡』が『史記』の影響を受けたことを検証する。その上で、第二章では両書を比較し、両書の共通点である系譜の構造により、具体的に『大鏡』における『史記』の影響の仕方及び「紀伝体」における「本紀」の必然性を追究する。また、第三章では、『大鏡』の中心部分になる「道長」伝と『史記』の「李斯列伝」とを比較し、両書における「盛衰史観」の相違を追究する。

第一章『大鏡』と『史記』の中心史観

第一節『大鏡』の「栄落史観」

『大鏡』は、文徳天皇の時代から後一条天皇の万寿二年（一〇二五）に至る十四代百七十六年間の歴史を、仮名文を用いて物語風に叙述した史書である。その形式は対話様式であり、雲林院の菩提講が開始される前の時間を利用して作中人物

である大宅世継が行なった歴史の長話を記録したものである。大宅世継は語りの中で藤原氏の過去・現在・未来を「古鏡」のように「かくれなく」映そうとしており、この叙述態度は「本紀」¹⁴の終わりで夏山繁樹と大宅世継が交した歌に端的に示されている。

あきらけきかがみにあへば、すぎにしもいまゆくすゑのこともみえけり
(五九頁)¹⁵

すべらぎのあともつぎつぎかくれなく、あらたにみゆるふるかがみかも
(同上)

本章では、『大鏡』と同様に藤原北家の歴史を素材とし、道長への賛美の辞によって満たされた『栄花物語』と比較しつつ、果たして『大鏡』が道長の栄華の過程のみを語っているか否か、という点を検討してみる。

『大鏡』においては、「時平」伝では菅原道真、「師輔」伝では藤原元方、「伊尹」伝では藤原朝成、「為光」伝では藤原誠信、「藤氏物語」では藤原顕光と娘の延子が、それぞれ怨霊となっている。目加田さくを氏は『大鏡論』¹⁶においてこの点に言及され、これらの政争に敗れ、怨霊となった人物を「敗者」と称する。しかし、『大鏡』に現われた怨霊は単なる「敗者」ではなく、『大鏡』の構造上重要な役割を与えられている。この役割は菅原道真の事例ではっきりと示されている。「時平」伝に語られた菅原道真は、『大鏡』における最初の怨霊であり、時平一族を滅亡させているが、「昔物語」において再び取り上げられ、朱雀院に祟っている。この記述に対して、『扶桑略記』をはじめ、一般的な史書では道真が自分を左遷した醍醐天皇に祟ったと記されているが、こうした記述の相違が見られる理由は「昔物語」に「朱雀院むまれをはしまさずば、藤氏の御さかへいとかくしも侍らざらまし」(二五四頁)と語っている点にあると考えられる。すなわち醍醐天皇は母が藤原高藤の娘胤子であり、藤原北家の血を引いていない。それに対して、朱雀院は母が藤原基経の娘、時平の妹穩子であり、藤原北家の血を引いている。そこで『大鏡』では、菅原道真の祟る対象を藤原氏の栄華をもたらした朱雀院としたのであろう。そして、藤原元方の怨霊は冷泉天皇に祟り、更に「藤氏物語」において、藤原顕光

と延子の怨霊は藤原道長の栄華の基盤となっている娘までにも祟る。

さて、ことしこそ天變頻にし、よの妖言などよからずきこえ侍めれ。かんの殿のかく懐妊せしめたまふ、院の女御殿の、つねの御なやみのなかにも、ことしとなりては、ひまなくおはしますなるなどこそ、おそろしうけ給はれ。

(二四八頁)

歴史的事実としては、寛子は万寿二年七月に死去している。しかし、松村博司氏は、寛子の「つねの御なやみ」が顕光と延子の怨霊の祟りによるものであると指摘している。¹⁹これは、前述の道真が朱雀院への祟りと、元方が冷泉院への祟りと合わせる記述であると考えられる。この歴史的事実の記述の仕方は『大鏡』の構造における怨霊の役割と密接にかかわっている。

「列伝」が始まる前に、世継は、道長の栄華を「このみ」と譬えて語っていた。

うゑきは、根をおほしてつくろひおほしたてつればこそ、枝もしげりて、このみをもむすべや。

(五八頁)

天皇と婚姻関係を有する娘を「根」と譬えている以上、「根」が枯れると、藤原道長一族の栄華も衰退することになる。

『大鏡』の著者は道長の「衰」を見届けているが、象徴的にしか描いていない。「道長」伝までの「列伝」において、一方では道長の繁栄の理由を語り、もう一方では道長の衰退の理由を、怨霊の形で暗示しているのである。確かに「盛衰」の割合では、「盛」の部分の方が多いが、物語の構造として、「衰」の部分も無視することができないと考えられる。

又、「道長」伝は、道長の「衰」を象徴的に語るのと同時に、「このきたのまんどころの二人ながら源氏におはしませば、すゑのよの源氏のさかえたまふべきとさだめ申なり」(二一三頁)のように、藤原氏から源氏への権力の移行についても予言している。「列伝」において藤原氏の「衰」を語ることが多くないのと同様に源氏についての語りも多くない。しかしながら、藤原氏から源氏への権力の移行の必然

性については語られている。

「基経」伝では、陽成院の退位にあたり次の天皇を誰にするかという公卿の会議があったが、その際に源融が「ちかき皇胤をたづねば、融らもはべるは」（六九頁）と自薦している。この件は基経に拒否されたが、ここでは源氏の貴種性は天皇の血筋と繋がるものであることが明確に表わされている。『大鏡』においては道長と倫子の関係に最も明確であるが、藤原氏は源氏との通婚により、家格を向上させてきた。しかし、源氏が藤原氏とほぼ同等の地位を持ちそうになると、源氏もまた他氏排斥の対象となる。「師尹」伝における源高明の左遷はこの一例である。『大鏡』において、藤原氏と源氏が同時に栄えることはできないのであり、源氏の栄華が藤原氏の衰退と表裏の関係として描かれている。²⁰

「道長」伝によれば、道長は源師房を尊子の婿にした。現実には源師房は藤原氏と婚姻関係を結ぶことで藤原氏と同化を図り、それによって政界に進出し、右大臣となった。院政期には、源師房を始めとする村上源氏や醍醐源氏などが進出し、源氏の繁栄がもたらされた。『大鏡』は撰関家の衰退する万寿二年以降に著わされた書物であるにも関わらず、このような現実については一切触れず、源師房に関しても、ただ道長の口を通して「おもひをきてさせ給やうありけむ」（二〇九頁）と誉めるに止めている。

しかし、源氏に繁栄をもたらしたもう一人の人物である禎子内親王に『大鏡』は重要な役割を与えている。まず世継は「藤氏物語」において、内親王が誕生したときに見た夢が、故女院詮子及び太宮彰子の誕生したときに見た夢と「ただおなじさまなる」（二四九頁）ものであるため、内親王もまた同様に「よろづをしはかられさせ給御ありさま」（同上）であると語り、更に内親王の行く末が「よくいひけるもの」（同上）であると予言している。『大鏡』には記されていないが、この予言が実現し、その後禎子内親王は後朱雀天皇の後となり、撰関政治から院政への交替の契機となった後三条天皇を産むに至っている。「藤氏物語」ではさらに無量寿院参詣の際、道長が禎子内親王に「なにかるさせ給。たたせ給へ」（二四五頁）と言い、「なげしのおりのぼらせ給御手（を）とらへつつ、たすけ申させ給」（同上）と親しそうに禎子内親王の手を取る様子が語られているが、藤原氏の繁栄が源氏に流れていくことの象徴的な表現であると考えられる。後に「昔物語」には以下

のように記されている。

又、太宮のいまだをさなくおはしましける時、北政所ぐしたてまつらせたま(ひ)て、かすがにまいらせたまひつりけるに、おまへのものどものまいらせすへたりけるを、俄につじかぜのふきまつひて、東大寺の大佛殿の御前におとしたりけるを、かすがの御まへなる物の、源氏の氏寺にとられたるは、よからぬことにや。これをも、そのおり、世人申ししかど、ながく御すゑつがせ給は、吉相にこそはありけれとぞおぼえ侍な。(二七五頁)

藤原氏の繁栄、藤原氏の衰退、源氏の繁栄が、波のように次々と現われては消える様子が描かれているが、ここでは藤原氏の「盛」は当初から源氏にとってかわられる「衰」と一体となって、あらかじめ示されている。道長の関係するこの寺社参詣のエピソードは前述の無量寿院参詣と本事例しかない。この二つの事例は対応して、道長の繁栄と衰退を暗示しているのである。その中に藤原氏の権力争いの醜さについても「かくれなく」語られることになる。

「時平」伝には道真が左遷されたとき詠んだ漢詩が収められている。

驛長莫驚時變改，一栄一落是春秋。²¹ (七二頁)

これは本来道真自身の「栄」と「落」を感嘆した詩である。まさに菅原道真が詠んだ詩と同様に『大鏡』で語った藤原氏の歴史も、藤原氏の「栄」「落」を語り、その由来を追究したものである。道真の詩に現われた「栄」「落」は『大鏡』における中心史観を暗示するものであると考えられる。²²

第二節『史記』の「盛衰史観」

『史記』における中心史観について、櫻井龍彦氏は「物盛則衰」を中心史観として観た『史記』の諸相²³において、司馬遷の歴史の記述が「始」＝「盛」、 「終」＝「衰」という構造であり、両者の間に横たわる時間的経過を「物盛則衰」と法則化され、「下降の動線で形態化され」と指摘された。

確かに、櫻井氏が指摘されたように司馬遷の「仁安に報ずる書」に「網羅天下放失舊聞。略考其行事。綜其終始。稽其成敗興壞之紀。上計軒轅。下至于茲。為十表。本紀十二。書八章。世家三十。列傳七十。凡百三十篇。亦欲以究天人之際。通古今之變。成一家之言」²⁴により、「(司馬)遷が歴史に生起する様々な現象の興亡盛衰を考察するという意図」があるのである。しかし、司馬遷は『史記』において、「盛」そして「衰」の歴史現象を描き、歴史の基本構造を「物盛則衰」と法則化しながら、更にこれらをもたらしした要因を執着に追究していると考えられるが、氏は「衰」をもたらし要因までは指摘しなかった。本節はこの要因についてを追究してみたい。『史記』では「太史公自序」において「本紀」について次のように述べられている。

罔羅天下放失舊聞，王迹所興，原始察終，見盛觀衰，論考之行事，略推三代，錄秦・漢，上記軒轅，下至于茲。著十二本紀。 (『史記』卷百三十)²⁵

ここから司馬遷は『史記』の区分を、三代、秦・漢と分けているように見える。そして、これらの関係については「高祖本紀」の「論贊」において以下のように記されている。

夏之政忠，忠之敝，小人以野。故殷人承之以敬。敬之敝，小人以鬼，故周人承之以文。文之敝，小人以僂。故救僂莫若以忠。三王之道，若循環。終而復始。周・秦之間，可謂文敝矣。秦政不改，反酷刑法。豈不謬乎。故漢興承敝易變，使人不倦。得天統矣。 (『史記』卷八)

この中での秦への評価は司馬遷が秦の「衰」の要因に注目していることを示している。何故秦に注目するのかは「六国年表第三」に以下のように述べている。

傳曰。法後王。何也。以其近己，而俗變相類，議卑而易行也。學者牽於所聞，見秦在帝位日淺，不察其終始。因拳而笑之，不敢道。(中略)余於是因秦記，踵春秋之後，起周元王，表六国時事，訖二世，凡二百七十年，著諸所聞興壞之端。後有君子以覽觀焉。 (『史記』卷十五)

司馬遷が他の「學者」と異なり、真剣に秦を「盛」から「衰」まで観察し、後の「君子」に、自分の意見が受け入れられることを期待していることが記されている。『史記』に記された時代の中で秦が一番短いため、「盛」から「衰」まで完全に記されている。なお「後有君子以覽觀焉」と類似した表現は「太史公自序」の最後のみ再び現れたことも『史記』における秦王朝の記録の重要さを強調し、司馬遷が秦の盛衰を観察し、この要因を追究し、漢を戒めようとしたと考えられる。これこそ「法後王」の意味であろう。²⁶

しかし、「物極則衰」という重要な言葉が「李斯列伝」に現れており、「盛衰史観」における李斯列伝の重要な役割を示している。櫻井氏も前掲した論文で「秦本紀」が秦代の前期史で、「始皇帝本紀」は後期史であると指摘されたことがある。氏の指摘した「始」＝「盛」＝「聖君」、 「終」＝「衰」＝「暗君」という歴史の基本的構造であれば、「秦本紀」では「盛」を描き、「始皇帝本紀」では「衰」を描くはずである。しかしながら「始皇帝本紀」には、秦王朝の「盛」から「衰」への下降過程を詳しく描かれなかった。それについての記述は「李斯列傳」にある。「李斯列傳」では李斯のみが主人公ではない。趙高、始皇帝の末子である胡亥（後の二世）も多く描かれている。その記述はまさしく秦王朝の「衰」である。そこに、秦王朝が「盛」から「衰」に転換するきっかけとなった「沙丘之變」について、「始皇帝本紀」に「語具在李斯列傳中」と一言加えた上で、詳しい記述は「李斯列傳」に移された。そこで、趙高が「沙丘之變」の主謀として描写され、会話を中心に「沙丘之變」は描かれている。「沙丘之變」においては、趙高はまず胡亥に始皇帝の長男である扶蘇を殺し、天子の位を奪い取ろうと唆したと記されている。胡亥が不義かつ不孝の行動であるためらった際、趙高は以下のように述べ、胡亥を説得した。

臣聞湯・武殺其主，天下稱義焉。不為不忠，衛君殺其父，而衛國載其德，孔子著之。不為不孝。²⁷
 （『史記』卷八十七）

この中に「湯・武殺其主，天下稱義焉」について、「游侠列傳」には、以下のように議論している。

鄙人有言曰。何知仁義。己饗其利者為有德。伯夷醜周，餓死首陽山。而文・武不以其故貶王。跖・躑暴戾。其徒誦義無窮。由此觀之，竊鉤者誅，竊國者侯。侯之門，仁義存。非虛言也。²⁸
 (『史記』卷一百二十四)

「仁義」即ち「徳」のあることであるが、これは「利」を受けた人が「利」をくれた人に誉えることである。文・武王が「仁義」と誉えられたことは跖・躑が「義」と誉えられたことと同じく「利」を受けた人に誉めたたえられたのである。しかし、伯夷が周を醜いと思い、首陽山に餓死したが、文・武王が王としてそしられなかった。これを見ると、世の中はやはり国を盗んだ人は諸侯となり、諸侯の所に「仁義」があるのである。これは彼らが「利」を与えられるからである。ここでは「竊國者」が誰であるかは指摘されなかった。しかし、「伯夷醜周，餓死首陽山。而文・武不以其故貶王」については列伝の首巻に置かれている「伯夷列傳」に記されている。その記述は以下のとおりである。

- (1) 其傳曰。伯夷・叔齊，孤竹君之二子也。父欲立叔齊。及父卒，叔齊讓伯夷。伯夷曰。父命也。遂逃去。叔齊亦不肯立而逃之。国人立其中子。
 (『史記』卷六十一)
- (2) 於是伯夷・叔齊聞西伯昌善養老。盍往歸焉。及至西伯卒。武王載木主，號為文王，東伐紂。伯夷・叔齊，叩馬而諫曰。父死不葬，爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君，可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰。此義人也。扶而去之。
 (下線筆者) (同上)
- (3) 武王已平殷亂，天下宗周。而伯夷・叔齊恥之，義不食周粟。隱於首陽山，采薇而食之。及餓且死作歌。其辭曰。登彼西山兮，采其薇矣。以暴易暴兮，不知其非矣。神農・虞・夏，忽焉沒兮。我安適歸矣。于嗟徂兮，命之衰矣。遂餓死於首陽山。
 (下線筆者) (同上)

「伯夷醜周，餓死首陽山」の理由は「辭」に記されたように、主に武王が「以暴易暴兮，不知其非矣」のためである。この「非」とは具体的に言えば、伯夷の諫言である「父死不葬，爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君。可謂仁乎」を指し、

いわば武王が紂を討つことが「孝」と「仁」に反することであると司馬遷は考えている。しかし、『史記』において武王が「以暴易暴兮，不知其非矣」としたのは、司馬貞が『史記索隱』において指摘したように、武王が自ら過ちを犯したとは知らないで、武王自身の責任とされていないようである。その責任は記事(2)と対照すると、太公にあると考えられる。伯夷が諫言した際、太公は「此義人也」と伯夷を称賛している。太公は武王の行動が過ちであることを認めているのである。しかし、太公が武王の過ちを知りながらも、「扶而去之」という行動を取り、武王の前から伯夷の手を引いて退かせたと描かれている。

太公について詳細に記しているのが「齊太公世家」である。ここでは、太公が武王の「師」であり、積極的に武王に紂を討つことを勧めている²⁹。そのあと、「於是武王已平商而王天下。封師尚父於齊營口」と記しており、太公は武王が天下を取るに謀って自ら「齊」という領地を得たことが描かれている。そして、領地を得た太公が「東就国。道宿行遲。逆旅之人曰。吾聞時難得而易失。客寝甚安。殆非就国者也。太公聞之，夜衣而行，黎明至国」（『史記』卷三十二）と急いで「齊」に着くことをも描かれている。「世家」は「列傳」の前にあり、「齊太公世家」において、太公の紂を伐つことの積極性と「謀」を強調されているにもかかわらず、「伯夷列傳」に太公は前述の行動をとったと描かれている。そして、結果的に太公は武王が紂を討つことにより、「齊」という大国を得た。「游侠列傳」に記された「竊國者」とはまさしく太公のような人物ではなからうか。

『史記』において、「竊國者」にあたる人物は齊太公だけではなく、「魯周公世家」に記された周公もそれにあたる。周公は武王の弟であり、かつ太公と同様に武王に従い紂を討って「魯」という領地を得た。従って、周公は太公と同様に「竊國者」であると考えられる。「太史公自序」には、「太史公曰。先人有言。自周公卒，五百歲而有孔子。孔子卒後，至於今五百歲。有能紹明世，正易傳，繼春秋，本詩書禮樂之際。意在斯乎。意在斯乎。小子何敢讓焉。」（『史記』卷百三十）と記されたとおり、周公が『尚書』編纂したと指摘している。「游侠列傳」の指摘によれば、周公は『尚書』において、文王・武王を「徳」、即ち「仁義」を有すると褒めている。しかし、周公のあとの孔子は武王が紂を伐つことについて批判しなかった。司馬遷は武王の誤ちを指摘し、「義」を守るため、列傳の首巻に

「伯夷列傳」を置いた。また、『尚書』などにより、「湯・武殺其主，天下稱義焉」となったことが『史記』に記され，更に『尚書』などでは武王が紂を討つことを「義」と称したゆえ，後世に影響を与え，秦の滅亡を招いたことを鋭く指摘した。³⁰

その上，司馬遷は「殷本紀」において「於是周武王為天子，其後世貶帝號號為王」と武王まで批判し，自分の態度をはっきり示している。

「太史公自序」においては、「伯夷列傳」を作るのは「末世争利，維彼奔義。讓国餓死，天下稱之」であると述べられている。伯夷がなくなった時は、「天下宗周」とされ，歴史における周王朝が「興」にあたる時期である。しかし，司馬遷はこの時期を「末世」とする。即ち，司馬遷は，歴史的事実とは別に，「義」の化身である伯夷がなくなったことで「末世」に突入したと考えている。このように，司馬遷は「盛」を見つめながら，その下に潜んでいる「衰」をもたらし要因を観察し，その要因はいずれ機能し，歴史的事実の「衰」をもたらしことを「李斯列傳」を通じて描いた。³¹

このように，『史記』は歴史の盛衰を記録しながら，「列傳」全体において，個人の盛衰を通して，歴史の盛衰の要因を追究している。盛衰において，特に「衰」に注目し，「衰」をもたらし重要な要因の一つを「義」が失われたことに求めていると考えられる。これは「物盛則衰」を『史記』の中心史観とするより，むしろ「盛衰史観」と名付けたほうがふさわしいであろう。

以上「伯夷列傳」の内容から，『史記』において，「盛衰史観」は重要な史観であると確認した。「盛衰史観」において，司馬遷は孔子を批判する部分も見られるのであり，盛衰の要因を孔子思想だけに限定して追求していないと考えられる。次に著作態度の比較から「盛衰史観」は「三史」における『史記』の特徴であるか否かを検討する。まず，『漢書』と『後漢書』の関係を確認した上で，『史記』とそれに続く『漢書』・『後漢書』（范曄）との関係を検討してみる。

『後漢書』の「序」に相当する「獄中與諸甥姪書」では，「詳觀古今著述及評論，殆少可意者。班氏最有高名」と班氏の『漢書』を褒めながら，『漢書』と比べて，自分の『後漢書』は「博瞻不可及之，整理未必愧也」と述べている。従って『後漢書』は『漢書』をモデルにしていると考えられる。

一方，『史記』と『漢書』との間には，立場上，大きな相違がある。『史記』は，「太

史公自序」において、自ら自己の編纂立場が「厥協六經異傳，整齊百家雜語」であると述べ、「六經」だけに基づいて史書の編纂をするのではなく、幅広く諸子の「百家雜語」も参照し、確認した上で、「一家之言」をなしたものであるとしている。これに対して、『漢書』の著者である班固は、「司馬遷傳」において、「論大道則先黃老而後六經，序游俠則退處士而進姦雄，述貨殖則崇執利而羞賤貧」（『漢書』卷六十二）³³と述べ、「黃老」と「六經」とを対立させた上で、「六經」の立場から『史記』を批判している。これは父、班彪の『史記論』³⁴における『史記』に対する批判、「其論術學。則崇黃老而薄五經。序貨殖。則輕仁義而羞貧窮。道游俠。則賤守節而貴俗功。此其大敝傷道」を受け継いだものである。班彪は更に、「誠令遷依五經之法言。同聖人之是非。意亦庶幾矣」と述べ、「五經」に基づいて明らかに『史記』の立場を批判している。これは司馬遷の本意とも異なるものであると考えられる。

班彪は司馬遷が「極刑」を受けた理由を「大敝傷道」であるとしていた。班固も同様に、司馬遷が「不能以知自全」であると惜しみながら、「明哲保身」を主張している。また、『漢書』の編纂方法は、途中で、官撰に変わり、そのため朝廷から厳しい制約を受けている。『漢書』は『史記』について、「私作本紀，編於百王之末，廁於秦項之列，太初以後，闕而不録」（『漢書』卷一百）と述べ、厳密に「旁貫五經」（同上）、聖人（周公、孔子）に従い、「漢紹堯運」（同上）を前提にして、漢の高祖から王莽までの二百三十年間の歴史を記録したものである。漢において、儒教が思想の主流となり、国家に採用されたので、『漢書』以後の正史の史観は、基本的に『漢書』の思想を継承している。

『史記』と『漢書』の立場の根本的な相違は、「五經」だけに基づいているか否かにある。これは前述した盛衰の要因を追求するのは孔子思想に限定しない司馬遷の態度とは一致している。ゆえに、「盛衰史観」は『史記』だけの特徴である。

前述したように、従来の日本史書と異なって、平安時代に著われた『大鏡』は「紀伝体」を採用している点と「盛衰史観」を有するという点、この二つの特徴がある。平安時代、貴族官人の間では、中国から伝来した『史記』『漢書』『後漢書』（范曄）から成る「三史」が頻りに読まれた。³⁵この「三史」は、いずれも「紀伝体」を採用しているが、史観上、他の二者と根本的に異なるのは、『史記』だけが「盛衰史観」を有する。以上のことから、『大鏡』が『史記』の影響を受けていることを検証される。

第二章『大鏡』と『史記』の「紀伝体」

『大鏡』が『史記』の影響を受けていることを検証されたが、両書における「紀伝体」「盛衰史観」については、共通点もありながら、相違点もある。本章では、特に「紀伝体」について具体的に分析する。

第一節『大鏡』の構成

松村博司氏は『歴史物語』において、『大鏡』の構成を以下の五つの部分に分けられている。

	起	結
序	冒頭	いひつづけはべりし(四十頁)
本紀	文徳天皇(四一頁)	よにすぐれさせたまへり(六三頁)
列伝	左大臣冬嗣(六五頁)	ありさまをすこし又申べきなり (二二六頁)
藤氏物語	世中のみかど(二二六頁)	さしいでまほしかりしか(二四九頁)
昔物語	いといとあさましくめづらかに (二五一頁)	いまはよせてのらせたまふとぞ (二八五頁)

『史記』の構成は「本紀」「表」「書」「世家」「列傳」であるが、松村氏は両書の構成を比較し、以下のように述べられている。

『大鏡』の帝紀は、『史記』の本紀に、列伝・藤氏物語は、世家・列伝に、また昔物語は書(志)に、それぞれ相当するものであろうと想像される。

(一〇六頁)

しかし、この構成について、氏自身も以下のように疑問を抱いている。

- (1) 世家をたてたのは『史記』の特色で、『大鏡』の列伝は世家に相当すると見てもよいというような見解もあるが、それはともかく、わが国には世家に相当するものがないので、『大鏡』は省いたのである。この点ではむしろ『漢書』以下に似ている。『漢書』は、帝紀一二篇、表八篇、志一〇

篇，列伝七〇篇から成る。 (一〇六頁)

(2) ただし，昔物語の部分には，目的とどのように結びつくのか理解に苦むものがある。 (一〇三頁)

また，氏はこれより二十年前の「大鏡に投影した海外文学——史記の影響について」³⁶において，以下のように述べている。ただし，「本紀」「世家」については論じられているが，「藤氏物語」「昔物語」については触れられていない。

大鏡の構成を整理し，内容によって編目名を付するならば，帝紀（序を含む），列伝，藤氏物語，昔物語（結びを含む）とすることができる。そして，帝紀においては，文徳天皇から後一条院（天皇）まで帝王名を，また臣下列伝にあっては左大臣冬嗣以下太政大臣道長までを目標として掲げ，やや史書としての体裁を整えている。

また，目加田氏が『大鏡論』において，『大鏡』の構成を「序」「帝紀」「権臣列伝」「結び」（九〇五頁）の四部と分けており，必ずしも松村氏の構成が定説として定着しているわけではない。³⁷以上のように，改めて『大鏡』の構成を整える必要があると考えられる。

しかし，本来『史記』の「世家」は「列伝」の前に位置付けられている。また，各世家はそれぞれの姓をもっており，各世家の人物の間に血の繋がりはない。従って，松村氏の指摘された通り，『大鏡』には，『史記』の「世家」に相当するものはない。しかし，『大鏡』の各伝記では，対象人物はお互いに血の繋がりをもって列伝全体に渡って藤原氏の栄華及び衰退を語っている。それは，やはり『漢書』と異なって『史記』の「列傳」に近い。

なお，『史記』において，「書」は「禮樂損益，律歷改易，兵權山川鬼神天人之際，承敝通變」（『史記』卷百三十）のであり，『大鏡』における「昔物語」の内容とは異なるので，「昔物語」が「書」に相当するとは考えられない。

これまでの『大鏡』の構成への検討には，道長の「御ありさま」を道長の栄華の意味に解釈されていた。しかし，本稿の検討より，道長の「御ありさま」が道長一

族の栄華及び衰退の意味であると考えられる。つまり「藤氏物語」はむしろ道長の栄華の有様とその由来を改めてもう一度考えるために存在するのである。また「栄落史観」の視点に立って『大鏡』の内容から構成を考えると、「昔物語」は藤原氏の衰え、源氏の栄えの予言をするのは当然である。従って、「道長」伝は松村氏が指摘された「道長」伝、「藤氏物語」及び「昔物語」から構成されているものであると考えられる。内容上『大鏡』を整理すると構成を以下のようになるのではないであろうか。

	起	結
序	冒頭	いひつづけはべりし (四十頁)
本紀	文徳天皇 (四一頁)	げにさることぞかし (五八頁)
列伝の序	帝王の御次第は (五八頁)	よにすぐれさせたまへり (六三頁)
列伝	このおとどは (六五頁)	いまはよせてのらせたまふとぞ (二八五頁)

第二節 「紀伝体」における「本紀」の必然性

『大鏡』の「本紀」と「列傳」の関係については、岩橋小弥太氏や山岸徳平氏が、若干の言及を行っているが、松村博司氏の『歴史物語』が最も詳しく論じられている。³⁸

『大鏡』においては、天皇の次第は副物の観があり、皇室と、藤原氏の姻戚関係を説明するところに主眼が置かれており、中国の正史における本紀のような位置と内容を持つものではない。この点が本質において両者が遥かに遠いとせられるゆえんであるが、『大鏡』の作者は自己の著作目的に従って十分な独自性を発揮した。(一〇七頁)

また、「本紀」について以下のように論じている。

しかし絶対者の歴史は依然として本紀（帝紀）にあり、帝紀あつての道長であるから、内容の本質は本来の紀とは遥かに遠いものであっても帝紀の存在

は絶対に必要なものであった。このような点においても『大鏡』は史記の外廊に学んだ以上に——むしろ学んだがためかえって書こうとすることをよく主体的に弁えることができ、創意を働かすことができたのであろう。

(一一二頁)

『大鏡』と『史記』との関係を論ずる前に、まず『大鏡』の「自己の著作目的」とは何か。また、何故「帝紀」の存在は絶対に必要なものであったかを検討したい。これについて、松村氏は「『大鏡』は藤原道長の栄華の由来する所に、焦点を求めたので、行状記は「遊星群」の行動を主として描き、「世界の中心」も道長にあるかのように見える」(一一二頁)とされているが、氏の指摘は道長の栄華に限定されている。本稿では、『大鏡』が「栄落史観」も有するため、その著作目的は道長の栄華及び衰退の由来する所であると考え。本節では、『大鏡』の語った道長の栄華及び衰退の由来する所を明らかにしたい。

「本紀」では、文徳天皇から後一条天皇に至る、十四代の天皇を中心に語っているが、各天皇ごとに母后とその出自を必ず記している。この理由について、大宅世継は「帝王の御次第は、申さでもありぬべけれど、入道殿下の御栄花もなによりひらけたまふぞと思へば、先みかど・後の御ありさまを申へき也」(五八頁)と語っている。この点から、「本紀」は入道殿下の栄花の由って来たる所以を述べるために存在しているものであると考えられる。

一方、「列伝」は冬嗣から道長に至る、二十人の列伝に分かれるが、大臣を次々と語る理由は、本稿で分類した「列伝の序」に語られている。

「世間の、攝政・關白と申し、大臣・公卿ときこゆる、いにしへいまの、みなこの入道殿の御ありさまのやうにこそはおはしますらめ」とぞ、いまやうのちごどもはおもふらんかし。されども、それさもあらぬことなり。いひもていけば、おなじたね、ひとつすちにぞおはしあれど、かどわかれぬれば、人々の御こころもちるも又、それにしたがひてことごとになりぬ。

(下線筆者)(四十頁)

次にここに現われた「たね」「すぢ」「かど」「御こころもちる」という四つの

言葉についてを検討したい。

「たね」について。松村氏は『日本古典文学大系・大鏡』において、「たね」は種、血筋、系統。ここはそれの発生する基まで遡り、同一祖先の事」（四十頁）と指摘されている。「道長」伝には、藤原鎌足が天智天皇の「女御」を譲られたことに続いて、「御子の右大臣不比等のおとど、實は天智天皇の御子也」（二二九頁）と語られている。従って、「たね」とは鎌足のことでなく、天智天皇の落胤である藤原不比等のことであると述べられている。

「すぢ」について。松村氏は同書において、「同じ系統」（四十頁）と指摘されているが、また、「すぢ」の意味するものは、「師輔」伝において、藤原北家の血筋から師輔一家に限定されることになる。

「かど」について。松村氏は同書において、「家門」（四十頁）と指摘されているが、橘健二氏は『日本古典文学全集・大鏡』において、「家門。藤原不比等の子が、南家、北家、京家、式家の四家に分かれた。」（四十頁）ことであると、より詳しく説明されている。「列伝」の主人公はいずれも藤原北家の出身であるため、この「かど」は、実際に藤原北家を指している。また、「かど」は「道長」伝において、藤原北家から道長一族に限定されることになる。

「御こころもちる」について。本文により、これは四つの概念の中で、最も重要なものである。「時平」伝は藤原北家が宇多天皇の信用を受けた菅原道真を権力の座から排斥したことを描いている。また、「師尹」伝では、外戚であるため左大臣に就任した源高明も同じく藤原北家により、権力の座から排斥されている。つまり、藤原北家の「御こころもちる」とは、権勢を手に入れることを意味しているのである。藤原北家の確立された権勢を継承した藤原師輔は、若い頃、「ゆめに、朱雀門のまへに、左右のあしをにし・ひんがしの大宮にさしやりて、きたむきにて内裏をいだき。たてりとなんみえつる」（一二九頁）という壮大な権力欲の夢を見た。師輔以降、権力争いは藤原北家内部における摂政・関白争いを中心とすることになる。「道長」伝の最初においては、「この道長のおとどは、いまの入道殿下これにおはします」（二〇三頁）と、初めて「入道殿下」が藤原道長であることを明らかにしている。そして伊周と競射したときの道長の発願を示し、いずれも若い頃の道長の権力欲の強さを現わしている。

道長がいへよりみかど・きさきたちまふべきものならば、このやあたれ

(二二二頁)

攝政・關白すべきものならば、この矢あたれ

(二二三頁)

その後、道長は「よのおや」となり、当時日本国において唯一無二の栄華を得ている。

上述から「列伝」では、道長の栄華の由来を主に系譜にあると考えられる（図一を参照されたい）。

藤原不比等（たね）——藤原冬嗣——藤原師輔——藤原道長

道長の栄花はまさしく本稿で分類した「列伝の序」が記した「かどわかれぬれば、人々の御こころもちるも又、それにしたがひてことごとになりぬ」の結果として位置付けられているのである。ここで道長の栄華をもたらした主な要因は「家系」にあると考えられているが、「本紀」にはもう一つ系譜、即ち天皇の「帝系」がある（図二）。これらの二つの系譜には、藤原不比等が天智天皇の「みこ」であるという「道長」伝における語りによって、一つの接点を与えられている。しかし、道長の栄華は天皇をも超え、藤原氏もまた衰えていく。そして、直接天皇と血筋を持つ源氏はその代わりに栄えていくのである。よって、『大鏡』における系譜の構造は天皇の系譜を軸とし、天皇の系譜と繋がりのある藤原氏、源氏が繁栄するのである。

『大鏡』はこのように「自己の著作目的」がありながら、『栄花物語』と異なり、「紀伝体」を採用し、「帝紀」を設置しているのもこの構造を成立させるためであり、ゆえに「帝紀」の存在は必要なものであったと思われる。『大鏡』の「紀」と「傳」の関係を検討する前に、本稿はここで『大鏡』の検討から一旦はなれ、『史記』について検討する。『史記』において、「本紀」について「太史公自序」に以下のように述べられている。

罔羅天下放失舊聞，王迹所興，原始察終，見盛觀衰，論考之行事，略推三代，

録秦・漢，上記軒轅，下至于茲。著十二本紀。 （『史記』卷一百三十）

一方、「列傳」については以下のように述べられている。

扶義倣儻，不令己失時，立功名於天下，作七十列傳。（『史記』卷一百三十）

「太史公自序」においては、「本紀」と「列傳」との関係が述べられていない。

しかし、『史記』の「本紀」を分析すると、『大鏡』と同様な系譜の構造があることが分かる。まず「五帝本紀」は『帝繫』³⁹に基づいて、五帝の系譜を記している。

黄帝者，少典之子，姓公孫，名曰軒轅。

黄帝二十五子。其得姓者十四人。黄帝居軒轅之丘，而娶於西陵氏之女。是為嫫祖。嫫祖為黄帝正妃。生二子。其後皆有天下。其一曰玄囂。是為青陽。青陽降居江水。其二曰昌意。降居若水。昌意娶蜀山氏女。曰昌僕。生高陽。高陽有聖惠焉。黄帝崩。葬橋山。其孫昌意之子高陽立。是為帝顓頊也。帝顓頊高陽者，黄帝之孫，而昌意之子也。

帝顓頊生子。曰窮蟬。顓頊崩。而玄囂之孫高辛立。是為帝嚳。帝嚳高辛者，黄帝之曾孫也。高辛父曰螭極。螭極父曰玄囂。玄囂父曰黄帝。自玄囂與螭極，皆不得在位。至高辛即帝位。高辛於顓頊為族子。

帝嚳娶陳鋒氏女。生放勳。娶姬訾氏女，生摯。帝嚳崩。而摯代立。帝摯立不善。崩。而弟放勳立。是為帝堯。帝堯者，放勳。

堯立七十年得舜，二十年而老，令舜攝行天子之政，薦之於天。堯辟位凡二十八年而崩。（中略）舜曰。天也夫。而後之中國踐天子位焉。是為帝舜。虞舜者，名曰重華。重華父曰瞽叟。瞽叟父曰橋牛。橋牛父曰句望。句望父曰敬康。敬康父曰窮蟬。窮蟬父曰帝顓頊。顓頊父曰昌意。以至舜七世矣。自從窮蟬以

至帝舜，皆微為庶人。

（『史記』卷一）

「五帝本紀」における「帝系」に関する記述は司馬遷が五帝の血筋を重視する意図があると考えられる。

「五帝本紀」に続く「夏本紀」「殷本紀」「周本紀」「秦本紀」の冒頭には以下のように記されている。

夏禹名曰文命。禹之父曰鯀。鯀之父曰帝顓頊。顓頊之父曰昌意。昌意之父曰黃帝。禹者，黃帝之玄孫，而帝顓頊之孫也。禹之曾大父昌意，及父鯀，皆不得在帝位，為人臣。

（『史記』卷二）

殷契母曰簡狄。有娥氏之女，為帝嚳次妃。三人行浴。見玄鳥墮其卵。簡狄取吞之，因孕生契。

（『史記』卷三）

周后稷名弃。其母有邠氏女，曰姜原。姜原為帝嚳元妃。姜原出野，見巨人跡，心忻然說，欲踐之。踐之而身動，如孕者。居期而生子。以為不祥，弃之隘巷。馬牛過者，皆辟不踐。徙置之林中。適會山林多人。遷之而弃渠中冰上。飛鳥以其翼覆薦之。姜原以為神，遂収養長之。初欲弃之。因名曰弃。

（『史記』卷四）

秦之先，帝顓頊之苗裔。孫曰女脩。女脩織，玄鳥隕卵。女脩吞之。生子大業。大業取少典之子曰女華。女華生大費。

（『史記』卷四）

いずれも「五帝本紀」の系譜と繋がるように記述されている。

また「高祖本紀」の冒頭は以下のように記されている。

高祖，沛豐邑中陽里人。姓劉氏。字季。父曰太公。母曰劉媪。其先劉媪，嘗息大澤之陂，夢與神遇。是時雷電晦冥。太公往視，則見蛟龍於其上。已而有身。遂產高祖。

（『史記』卷八）

ただの「天子感生説」のようであるが、「高祖本紀」に次の記述もある。劉邦（後の高祖）が亭長になったとき、県のために「徒」を酈山に送ったが、途中多く逃げられてしまった。豊西の澤で止まって、劉邦は酒を飲んで「徒」を解散した。しかし、その中に劉邦に従う人は十数人である。劉邦はその中の一人に道を探しに行かせた。しばらくしてその人が戻ってきた。前方の道の真中に大きな蛇がいるから前に進めないと告げた。劉邦が酔っていて、「壯士行。何畏」と言い、そこへ行って剣を出して蛇を斬った。その後、劉邦は酔って寝た。

後人來至蛇所。有一老嫗夜哭。人問何哭。嫗曰。人殺吾子。故哭之。人曰、嫗子何為見殺。嫗曰。吾子白帝子也。化為蛇當道。今為赤帝子斬之。故哭。人乃以嫗為不誠、欲告之。嫗因忽不見。
（『史記』卷八）

のち、その人が高祖と出会って、高祖に以上のように告げた。この記事から「高祖本紀」では、高祖は赤帝（堯）の子としても記されていることが分かる。更に「高祖本紀」の「論贊」では以下のように述べられている。

夏之政忠，忠之敝，小人以野。故殷人承之以敬。敬之敝，小人以鬼，故周人承之以文。文之敝，小人以僂。故救僂莫若以忠。三王之道，若循環。終而復始。周・秦之間，可謂文敝矣。秦政不改，反酷刑法。豈不謬乎。故漢興承敝易變，使人不倦。得天統矣。
（『史記』卷八）

瀧川龜太郎氏は『史記會注考證』において、「鄒衍作五德終始傳，史公終而復始之説，蓋祖其意」と述べられている。よって、高祖について、「高祖本紀」の冒頭に直接に「帝繫」と結び付くように描かれていなかったが、嫗の説話、「論贊」により、「天子感生説」も五行説を踏まえた上で「五帝本紀」の「堯」と結びついていると考えられる⁴⁰。このように、各王朝の始祖が五帝の系譜と繋がることは、「太史公自序」で述べられた「王迹所興」を意味する。系譜の構造は五帝の系譜を軸とし、五帝の系譜と繋がりのある人物が各王朝の始祖となるのである。しかし、この系譜の構造は今まで指摘されなかった。その理由は「五帝本紀」の「論贊」に若干触れている。

孔子所傳宰予問五帝德及帝繫姓，儒者或不傳。（中略）予觀春秋國語，其發明五帝德帝繫姓章矣。（『史記』卷一）

「帝繫」が「儒者或不傳」である理由は、司馬貞の『史記索隱』は「五帝德帝繫姓，皆大戴禮及孔子家語篇名，以二者皆非正經，故漢時儒者以爲非聖人之言，故多不傳學也」とされているが、それだけではない。司馬遷は「易姓革命」を帝系との繋がりのある範囲に限定したかったとも考えられる。また、「五帝本紀」の地の文においては、帝系が記される前に必ず帝王の徳が記されている。これは「論贊」に指摘された『帝繫』と『五帝德』の順番と一致する。これも従来中国では帝王となる人物の「徳」を最も重視されることを反映している。ゆえに『史記』に記された系譜の構造を指摘されなかった。しかし、何故「本紀」にこのような構造を記されるか。

「太史公自序」において、司馬遷は自分の志を以下のように語っている。

先人有言。自周公卒，五百歲而有孔子。孔子卒後，至於今五百歲。有能紹明世，正易傳，繼春秋，本詩書禮樂之際。意在斯乎。意在斯乎。小子何敢讓焉。（『史記』卷一百三十）

このように太史公は『春秋』に継ぐものとして『史記』を書く志を述べている。更に司馬遷は『春秋』を「禮義之大宗」と述べ、『春秋』が天下で最も重要な倫理関係である君臣父子関係を述べたものであるとしている。「本紀」にこの系譜の構造を記すのは、少なくとも「君」となる人物を他の人物と区別しようという意図から出たものではなかろうか。「列傳」の首巻における武王への批判である「以臣弑君，可謂仁乎」も君臣関係を強く意識しているためであると考えられる。『史記』は君臣関係において強い倫理観を持つ書物である。

前述したように、『大鏡』における系譜の構造は『史記』の「本紀」における系譜の構造とよく似ている。⁴¹これは『大鏡』における『史記』の影響の仕方であるとも考えられる。しかし、それで『大鏡』の各伝記は『史記』の「本紀」に相当するという意味ではない。『史記』の君臣関係の強い倫理性の影響を受けて、

『大鏡』においては天皇が万世一系でありながら、歴史的栄華盛衰が氏族の間で循環すると語られているのではなからうか。

『大鏡』と『史記』の関係において、松村氏は「『大鏡』の作者は自己の著作目的に従って十分な独自性を発揮した」と結論したが、『史記』における「本紀」と「列傳」の関係はまだ明らかにされていない。故に『史記』における「本紀」と「列傳」の関係を明らかにした上で、両書の内容を検討することは今後の課題の一つとなる。

第三章「道長」伝と「李斯列傳」との比較

——「盛衰史観」を中心に——

第二章で論じてきたように、『大鏡』で中心となる人物は道長である。本章では「道長」伝を中心に、「盛衰史観」の視点から、『史記』でそれに相当する人物の伝記と比較する。

『史記』には五帝・夏・殷・周・秦・漢六つの時代を記録しているが、秦の盛衰が最も詳細に記されている。その上、「本紀」と結び付き、秦の盛衰と深い関係がある人物を描く伝記こそは「李斯列傳」なのである。また、『大鏡』・『史記』両書において、道長と李斯は人臣としての最高の地位に昇り、その一族が天子と姻戚関係を結んだ二点において共通しているので、両伝を比較して、「盛衰史観」の相違を分析してみる。

まず「道長」伝と「李斯列傳」の構成について検討する。その生涯の語り方により、「道長」伝は、大きく以下の五部に分けることができる。

	内 容	起	結
(1)	上昇過程についての記述。	このおとどは (二〇三頁)	さこそは侍べかんめれ (二〇四頁)
(2)	子孫を中心に道長の「ごありさま」への記述。	この殿は、きたの方ふたところおはします。(二〇五頁)	よをたもたせ給こと、かくて三十一年ばかりにやならせ給ぬらん。(二一四頁)
(3)	栄華の絶頂期と、出家についての記述。	ことしは満六十におはしませば (二一四頁)	いとどただ三后のみおはしますめり。(二一四頁)
(4)	道長の「御ありさま」の由来についての記述。	この殿 (二一四頁)	女どもにそむかれんことこのころぼそきにやとぞみえ侍し (二四八頁)
(5)	藤原氏の衰退と、源氏の繁栄の予言についての記述。	さて、ことしこそ天變頻に (二四八頁)	いまはよせてのらせたまふとぞ。(二八五頁)

一方、「李斯列伝」は、「起」「承」「転」「結」に従って李斯の盛衰を掲げている。⁴²

	内 容	起	結
起	荀子に学問を求めた動機と、荀子のもとに辞して、秦に入国したことについての記述。	冒頭	故斯將西説秦王
承	秦に入国から 相就任までについての記述。	至秦	斯皆有力焉
転	栄華の絶頂期、そして、栄華から衰退に到る過程についての記述。	斯長男由	趙高皆妄為反辭
結	李斯の死についての記述。	二世二年七月	遂以亡天下

「道長」伝と「李斯列伝」は、盛衰を記録し、その由来を追究する点において共通している。第一はの相違点は「盛」の要因である。

「道長」伝の場合は以下の通りである。このうち、道長に「盛」をもたらした主な要因は(1)と(2)である。

- (1) 伊周と競射のときに現われたような強い権力欲を持っていたこと。
- (2) 藤原氏の血筋により、栄華を得たこと。
- (3) 容貌・容体があたかも毘沙門天のようであったこと。
- (4) 詩歌の才に秀でていたこと。
- (5) 詮子の助けにより栄華を得たこと。
- (6) 若い頃から、胆力が強く神仏の加護も強かったこと。
- (7) 氏神の守りがあったこと。
- (8) 天皇家と姻戚関係があったこと。

一方、「李斯列伝」の場合は、今鷹真氏が「史記にあらわれた司馬遷の因果応報の思想と運命観」⁴³において、「人間は一つの行為を行うと連鎖的にその行為は次の行為乃至は反応を呼び起こす。次々と擴がって行く波紋は逆にはね返って始めの行為を行った人間に決定的な影響を及ぼす」と指摘されているように、まず冒頭に置いてある李斯の一生に決定的な影響を与えたことを記述している。

見吏舎廁中，鼠食不潔，近人犬，數驚恐之。斯入倉觀倉中鼠食積粟，居大廡之下，不見人犬之憂。於是李斯乃歎曰。人之賢不肖，譬如鼠矣。在所自處耳。

（『史記』卷八十七）

「李斯列傳」において、「不肖」は廁にいる鼠の如く貧しい生活をして不安定な状態にある。一方、「賢」は倉の鼠の如く豊かな生活をして安定した状態にある。李斯は荀子のもとを辞した際に、「卑賤之位，困苦之地」という言葉を発したが、これは廁に相当する。また、最盛期においては、「富貴」という言葉を発したが、これは「倉」に相当する。李斯はこの「富貴」の地位を求めるために、下級役人の地位を捨てて、荀子のもとで「帝王之術」を学んだ。その後、始皇帝の天下統一を助けて宰相となった。このように李斯は「富貴」に対する欲望に動かされることで、人臣としての最高の地位にまで昇りつめたのである。

第二の相違点は、栄華の絶頂期における両者の振舞及び「衰」をもたらした要因の追究の仕方である。

栄華の絶頂期における道長は、病気のあと、俄に出家したと描かれている。藤原氏に「衰」をもたらしたものは、前述したように怨霊である。従って、『大鏡』の前半部分とは異なり、「道長」伝は色濃く怨霊信仰に染められている要因はここにある。

一方、「李斯列傳」は、「倉之鼠」の地位を求めようとする李斯の意欲が、李斯の「盛」をもたらしたと同時に、李斯に「衰」をもたらしたと描いている。「盛」の絶頂期にいる李斯はの心境は以下のように記された。

嗟乎，吾聞之荀卿。曰。物禁太盛。夫斯乃上蔡布衣，閭巷之黔首。上不知其驚下，遂擢至此。當今人臣之位，無居臣上者。可謂富貴極矣。物極則衰。吾未知所稅駕也。

（『史記』卷八十七）

李斯は「衰」を意識しながらも、「富貴」の地位に居たがったために、始皇帝が亡くなった際、趙高の誘いに乗り、その結果自ら「衰」を招いたのである。

第三の相違点は「盛衰」の割合及び描き方である。

「道長」伝の場合、道長の「盛」の部分は実録の形で明確に描いているが、「衰」の理由を「怨霊」に求めている。しかも、象徴的な物語として描いている。更に全体に占める割合は、「盛」の部分に関する記述の方がより多くなっている。

一方、「李斯列傳」の場合は、「起」「承」「転」「結」の構成に従い、李斯の「盛」の部分も「衰」の部分もともに実録の形で明確に描いている。しかも、全体に占める割合は「衰」の部分に関する記述の方がより多くなっている。

また、「道長」伝には藤原氏から源氏への盛衰の交替は平和的であると語られているのに対して、「李斯列傳」には李斯の死をもって「衰」の幕を閉じている。これらの相違については、史書が作られた当時、それぞれの国において、背景となった仏教と儒教のありかたが反映していると考えられる。これについては今後の課題とする。

おわりに

『大鏡』は平安時代に漢文で書かれた「六国史」と異なり、また、仮名文字で書かれた『栄花物語』と異なり、『史記』を意識しながら、漢文を用いず、仮名文字で書かれた「物語風史書」である。『史記』は中国において、未だ外来思想の影響を受けていない⁴⁴経学時代初期の史書である。

本稿では両書の「盛衰史観」を中心に論じ、『大鏡』が『史記』の影響を受けたことを検証した。こうした内容の共通点の中でも、史観に着目して比較検証を行うことは、平安時代の漢文学の受容及びその変貌の問題、並びに仮名文学の成立の問題に新しい視点を与えると考えられる。また、これまで両書の関係については、単に『史記』が『大鏡』に与えた影響のみが論じられてきたが、本研究では『大鏡』における「系譜」研究を援用し、逆に『史記』の「帝繫」への着目に適用することで、両書の共通点だけではなく、「紀伝体」における「本紀」の意義を明らかにすることができた。残された問題はまだまだ多いが、以下の点については今後の課題とする。

- (1) 『史記』の各「本紀」と、それに関連する「列伝」の関係はまだ解明さ

れていない。その関係を明らかにした上で、『大鏡』と比較し、「紀」と「伝」の相違及びその理由を追究すべきである。

- (2) 道長の出家、「李斯列傳」に現われた五つの「上奏文」などの問題を触れた上で、『大鏡』に描かれた藤原氏の時代と『史記』に描かれた秦王朝と比較し、『史記』と『大鏡』との史観について更に全面的に比較したい。
- (3) 『大鏡』の「鏡」意識や『史記』の「鏡」意識⁴⁵と比較する。

- 1 『大鏡』に関する文献は多いが、松本治久氏を中心とする歴史物語講座刊行委員会が編集した『歴史物語講座・大鏡』の「大鏡研究文献目録」（風間書房 一九九七年）を参照されたい。『大鏡』の著者・著作年代については、説が分かれているが、著者が源順房であり、著作年代が院政期の応徳三年（一〇八六）前後とする説が近年注目されている。なお『大鏡』のテキスト問題について、『大鏡』では「藤氏物語」以後を『大鏡』と考えるべきでないという議論があるが、菊地眞氏と同じように私も現行の『東松本』を一つの作品と見なすべきであると考えている。
- 2 松村博司氏『歴史物語——栄花物語、四鏡とその流れ——』（塙書房 一九七九年）を参照されたい。
- 3 「鏡物」とは、『大鏡』の体裁を襲った『今鏡』『水鏡』『増鏡』などを指している。
- 4 『史記』に関する研究も多いが、中国では鄭之洪氏の『史記文献研究』『附録三『史記』研究論文索引』（巴蜀書社 一九九七年）を、日本では藤田勝久氏の『『史記』『漢書』研究文献目録（日本篇）』（『史記』『漢書』の再検討と古代社会の地域的研究 一九九四年）を参照されたい。著者と著作年代に説が分かれているが、著者が司馬遷であり、著作年代が漢の武帝建元年（前一三五）とするのは通説である。
- 5 大石千引氏注『大鏡短観抄』国文注釈全書、国文学注釈叢書に所収。
- 6 松村博司氏「大鏡」に投影した海外文学——史記の影響について（『国文学』六一—三、一九六一年）
- 7 藤岡作太郎氏『国文学全史平安朝篇』（平凡社 一九七四年）。
- 8 松村博司氏がこれについて二回に渡って検討された。

(1) 注6前掲論文。

(2) 注2前掲論文。

松本治久氏「大鏡は史記に何を学んだか——大鏡の歴史観を論ず」（『漢文学研究』一一、一九六三年）。

- 9 「三史」は『史記』『漢書』『後漢書』（范曄）である。
- 10 「紀伝体」という言葉を史書の体裁として使うのは唐の劉知幾である。しかし、彼が分類した「六家」は「尚書家」「春秋家」「左傳家」「國語家」「史記家」「漢書家」であり、「紀伝体」を直接『史記』に使用したのではない。宋の宋祁は『宋景文公筆記』『考古』において、「司馬遷史記為紀傳体之祖」と指摘している。清の趙翼は『二十二史劄記』（卷一）において、司馬遷が「編年体」を採用した『春秋』と異なり、初めて「紀伝体」を創始したことを記している。また、「紀伝体」の特徴は、人物の行事を中心として記述することである。その後、『史記』から『清史稿』まで、各王朝ごとに「紀伝体」を採用されている。その中で『史記』は「本紀」「表」「書」「世家」「列傳」五つの部分から構成されているが、後の史書は必ずしもこの五つの部分を有しているわけではない。しかし、「本紀」と「列傳」のみは必ず有している。これは「紀伝体」という命名の由来であろう。しかし、『史記』が何故「紀伝体」を創始したか、『史記』の「紀伝体」において五つ部分の関係、特に「紀」と「傳」の関係が如何なるものであるのかは、依然問題となっている。
- 11 「榮落史観」とは次に述べる「盛衰史観」とともに『大鏡』と『史記』にそれぞれの歴史観を私なりに表現した用語である。『大鏡』の「榮落史観」は時代区分に対して歴史的事実の「盛」（繁栄）及び「衰」（衰退）を記録しながら、盛衰をもたらした要因を追究する点において『史記』の「盛衰史観」と同じである。ただ「盛衰」は日本では無常観も意味するため、原文から「榮落」と取り出して「榮落史観」と名付けた。
- 12 櫻井龍彦氏「物盛則衰」を中心史観として観た『史記』の諸相（『名古屋大学中国語文学論集』第二輯 一九七七年）。「物盛則衰」とは、すべての物は盛なればやがて衰へるの意味である。
- 13 注11前掲論文に、櫻井氏は既に「物盛則衰」を『史記』の中心史観であると指摘されたが、この指摘をもっと重視すべきであり、更に盛衰をもたらす要因を含めて考えていきたいため「盛衰史観」と名付けた。
- 14 第一章には、松村氏の区分である「序」「本紀」「列伝」「藤氏物語」「昔物語」を用いる。
- 15 『大鏡』の引用は、すべて松村博司氏の校注された『日本古典文学大系21・大鏡』（岩波書店 一九七〇年）に基づく。
- 16 特に、「伊尹」伝における藤原朝成の場合は、歴史的事実を曲げてまで、権力争いに敗れ、怨霊になった物語として語られている。これについて、橋健二氏は『日本古典文学全集・大鏡』において、「類話は『古事談』二・『続古事談』二・『十訓抄』九などにもあるが、いずれも、参議を競望して遺恨をふくみ、のちに朝成が納言の闕を望んだとき、摂政であった伊尹が拒絶したという話になっている。『公卿補任』異本によると、蔵人頭任官は両者同日であって、明らかな矛盾。『古事談』二・『十訓抄』などにみえる、大納

- 言競望のときの説話に関連させての『大鏡』の作為とすべきであろう」（一九九頁）と述べられている。
- 17 目加田さくを氏『大鏡論——漢文芸作家圈における政治批判の系譜』（笠間叢書 一九七九年）。
- 18 『国史大系第十二巻・扶桑略記』第二十三 醍醐（延喜三年）（吉川弘文館 一九六五年）。
- 19 松村博司氏が『大鏡』（岩波書店 一九七〇年）において、「寛子は、小一条院の最初の妃であった延子と、その父顕光の怨霊にとりつかれて、病氣勝ちであった」と指摘されている。
- 20 菊地眞氏が『大鏡』の君臣関係における時代の変遷（『中古文学』五八号、一九九六年）に指摘されたように源氏の繁栄も藤原氏の繁栄の一部であるという説もある。
- 21 「貞享板本『菅家後集』による「明石駅亭口詩」に見え、「此の詩は或る僧侶の書の中に在りきといふ。真偽をしらず。しかれども、後の為に書き付くところなり」と述べている。（橋健二氏『日本古典文学全集・大鏡』小学館 一九七四年）
- 22 『大鏡』以前の日本史書には、怨霊が現われているが、神の怒りとして記されている。『大鏡』のように、「衰」をもたらしたものとして記されるのではないのである。
- 23 注12前掲論文。
- 24 梁の蕭統が編纂した『文選』巻四十一（中華書局 一九七七年）を参照されたい。
- 25 『史記』の引用はすべて瀧川亀太郎氏『史記會注考証』（宏業書局 中華民國八十一年）による。
- 26 「後王」とは、古聖王を受け継いだ近代の王のことである。「法後王」とは、近代の王を法とするのであり、『荀子』巻三に現われた言葉である。
- 27 錢大昕曰、春秋衰公三年、衛石曼姑帥師圍戚、公羊以爲伯討、孟子書衛君輒爲孝公、故趙高爲此言、然蒯聵未當死乎輒、輒亦無德可載也。（『史記會注考証』卷八十七）
- 28 『莊子』卷十に「何以知其然邪。彼竊鈎國者侯。窮國者侯。侯之門而仁義存焉」と記されている。
- 29 武王が二回目出師しようとするとき、「人亀兆不吉。風雨暴至。羣公盡懼」であるのに、「唯太公彊之勸武王」であり「武王於是遂行」となり、遂に武王が天下を取ったのである。
- 30 周公が『尚書』を編纂し、その後孔子が『尚書』を再編纂した。孔子は周公の『尚書』を踏襲したので、武王を批判しなかった。しかし、例え天下を取ったあと、「孝」「仁」などの「義」を修めても、最初天下を取るときの過ちを無視することができないと司馬遷は考え、「伯夷列傳」において、武王を批判したのではなかろうか。
- 31 注11前掲論文では、櫻井氏は「盛」＝「始」、「衰」＝「終」と指摘されたが、この点もっと検討する必要があると考えられる。
- 32 范曄『後漢書』「獄與諸甥姪書」（中華書局 一九六五年）。

- 33 漢の班固『漢書』卷六十二（中華書房 一九六四年）。
- 34 『全上古三代秦漢三國六朝文・全後漢文』卷二十三（中華書局 一九五八年）。
- 35 『続日本紀』（卷三十）・『本朝文粹』（卷六）『源氏物語』（卷二）などの書物に記されている。
- 36 注8前掲論文。
- 37 加藤静子氏も「大鏡と紀伝体」（『歴史物語講座『大鏡』風間書房 一九九七）において松村説について異議を述べられた。
- 38 岩橋小弥太氏『上代史籍の研究』（吉川弘文館 一九五八年）。山岸徳平氏「大鏡の構成と思想」（『国文学』一九五七年十二号）。
- 39 『大戴禮記』卷七（上海商務印書館 四部業刊初編縮本収録）に『帝繫』がある。
- 40 『項羽本紀』にも冒頭で「項籍者、下相人也」（『史記』卷七）と記されているが、「論贊」においては、「吾聞之周生。曰。舜日蓋重瞳子。又聞項羽亦重瞳子。羽豈其苗裔邪」と述べられている。
- 41 この結論の裏付けとして、筆者は今、日本における『史記』の流布を調べている所である。現在集めた資料により、当時「本紀」の収蔵ははるかに多い。それは、六国史のあと、国史の編纂がやめられたが、天皇の記事を中心とする日本の史書を編纂しようとする人が、史書の編纂の参考として、『史記』の「本紀」を収蔵し、よく読まれたと考えられる。
- 42 宮崎市定氏『宮崎市定全集・5・史記』「史記李斯列傳を読む」（岩波書店 一九九一年）。
- 43 今鷹眞氏『史記』にあらわれた司馬遷の因果応報の思想と運命観（『中国文学報』八、一九五八年）
- 44 漢の武帝が其即位の初にあたり名儒董仲舒の言を用いて儒教を尊崇し、諸子を抑圧して以来、儒教だけが栄えて諸子が衰え、儒教の教説が当時の思想を代表し、儒教の經典即ち五経の研究が学問全体である様な観を呈する様に成った。この時代を名けて経学時代と呼ぶ。（武内義雄氏『中国思想史』岩波全書 一九三六年）。
- 45 居今之世、志古之道。所以自鏡也。（『史記』卷十八）

（リョウ オン 中国文学）

